江戸惣總角物語

三

へ13
3562
3

牛込 本 池清

京都帝国大学図書

萬屋助六
三蒲屋總角 江戸紫三人同胞三編

種彦著

一

川添之歎冬

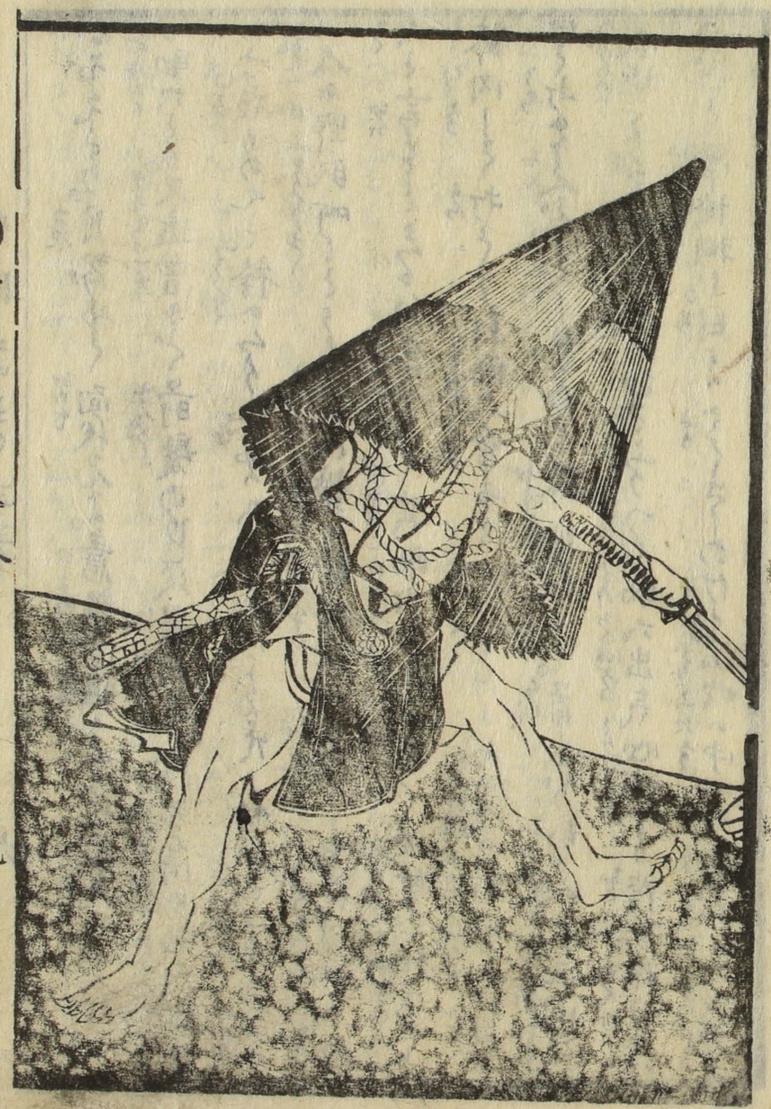
かくて、助六を夜海老よ柳町をとゝち出花門戸へと道をとを紀ゆく
越村ゝてし川まて来りしが春風枉雲ゝ月光水上ゝ閃ゝ
れば傘ゝ雪ゝ小止をとゝ川端ゝ
暫時西方とゝえゝるゝ
とゝ
彼偽舟の火のうげ

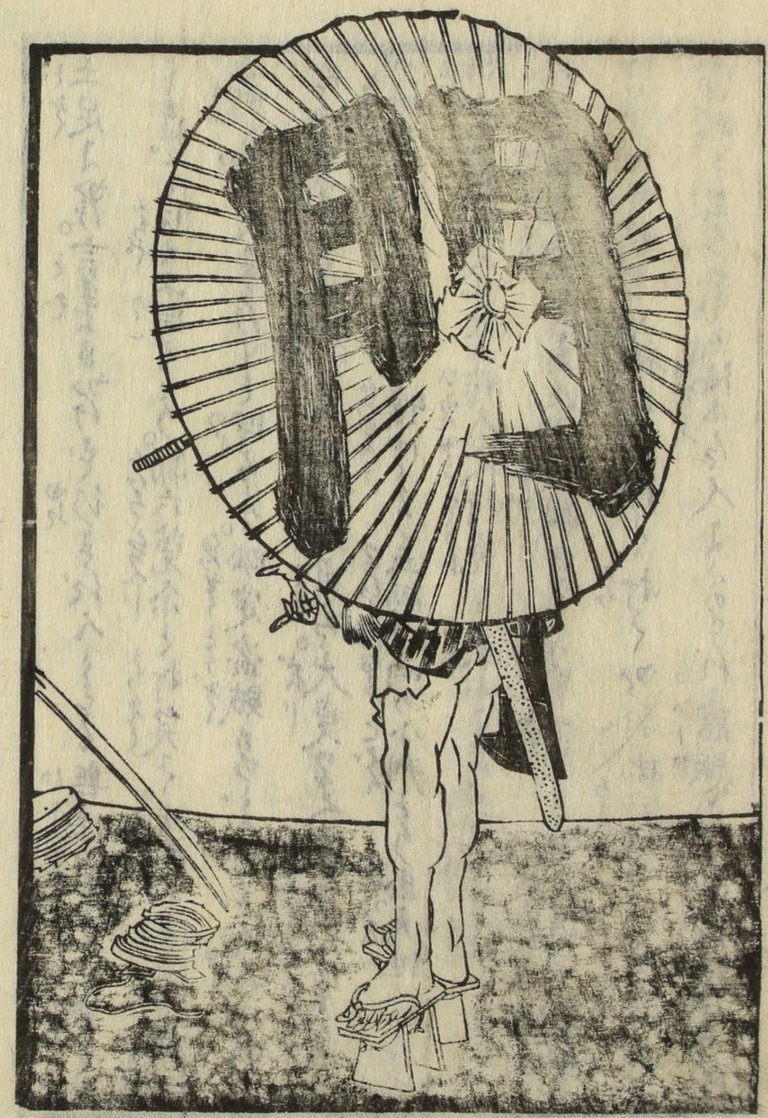
門 へ13
號 3562
巻 3

早稲田大学図書館
昭 34.6.3
寄 書

をぐるといふ詩さんを出らと。時ろがの蛙の声ふ川係の歌を
も笑をぐれ久とおめいろう。臨月よそじえつ。扇をもつて佩刀の
柄を拍子とり。山影門よいつさ。おせども出ぎと。中音よ朗詠。
あれをざんとあをふ。あゆーげるる男大路へ模さるふ臥屋ろうる酔
ゆやとおふぐこえんとなせば彼男叫んといひて起あがるゆよ武人
眼ハるれや。汝下駄をめてけば腰腹をきてふふこけられぬ。
痛やうくくや。我をそのおてふ帰をづれや。皆のめのあれよくと
よづれば。小笹のあらし。山吹のうげなんどよう。数多の野臥非人
あらつと出。助六を中ふとりこと。非人とうど人へ人。汝をどりる

土足よ光。言葉をかけど行ものんとと無法者をと一すも訪
ををじくにくふ四ろう。助六覚示と打笑て。歩めべきうあの大路
ふ倒ど。土足よりけーと四ろる。必定盗賊ものどりけーんよふけん
ろ中とろとも。大望成ものえーろ。大夏の子人の小夏ろ汝ホが今式
ば汝ホよめづけをと。懐中ろう五両六両の小判とり出大地へかげく
ゆくどどにろ。ふぶんの非人又行先よ立ちどろう。合力の金とあらむ。
非人の役よ受ちさあんろ。盗賊のものどりと言ーとを奇怪ろ式奴物な
いいせそ打殺せーく。棒ろあけく打くゆ助六内ろく通をろんー。
盗賊とろひのろう。汝ホ人よるのまれ意趣めるるの式待伏ろと





おおえたり。月影ふく面体みよ。意趣遺恨あるちかおえなし。花川戸
の助六なり。又近曽きく前髪あげし其異名ふよびたる角の助六とも
いふ若衆のくと。袴のたり言葉ふとりあげ。よる九よせしと男だてなり。
一人の野臥呵くとうち笑ひ紫の鬘帽子をとびしなり。花川戸の助
六と言ずとしまるれ出てちく其助六とそこと〱くが望む相手なと。
棒肉しく打くるれ助六傘ふく丁度うけとめ一人の野臥足を目が
けく打ちんとおもふ処ろく棒踏おとし。首をちかさんく三間斗
投退る。又まりづまふむさふうつく。助六出気心頭より發り。猿臂を
のばしく帯攙摑ミ目より高くさしあげくね山吹の中ふ打込ば花色衣着て

おびて。牧松もいるとぬくげりかりしも月の雲がくれ春雨一志きり降出し
ねばいかくて二人の非人おゆうれ暗をさひよう。左右より無手とくむ
助六後よ身をひけば両人いくうち空をつかんれ互ひ背をうち合せ痛
かくるは中ともくく。月は雲のまえまふあらわれ一跡れの影ふよく見
えれ同子うちふく互ひ助六あやまぐる小腕れ落る棒をなんなくあげ
無二無三ふ打くかる。助六すぐやく刀抜ぬち。頭上よ閃し追かけば花
のかけをとぶ小蝶の。雲霧よおふどくかく。そなちりぐくよ逃ゆく。助
六強くおわんとあるでむ。あげるふ刀をおさめ。棒の塵うちはらひ。自若
としく傍徨あり。手布ふく面をつゝし丈夫男後のうさよりうくびよう。

牧もいろゞ助六ふ切くくる。助六うゝくも身をうけく。鉾りと成去りと
かさ人。ゆ布ゝるゞ面を刀ゝ。是則門不入。そこそと身を引ゝ力の
柄ふ。ゆ成かゝゝ又月ハ雲ゝ隠れ。めとの暗とぞゝるゝ。門不ゝるゝ心ゝ
ゝひりん。三四間後ゝさぐり。大地へゝると壁銭蜘のごくゝる伏ゝ倒れ。生死
もさゝふ知とざれハ。助六にゝるひりん落ゝる傘ゝりあげく。月光地
ゝ敷く。松へども生ぞと朗詠。下駄をめて門不ゝ資成ふゝこゝゝく。
花川戸へぞ帰ゝる。門不衛く起あゞゝるもゝ。向ゝゝ来ゝし竹かゝの
さぶ正をかゞ。門不首尾ハゝふと同是則意休ゝ門不答ふゝゝ
ゝぶゆ。あゝくいひるハゝ。それ先ふ助六ゞ柳巷ゝあゝる成少出君ゝり

金をゝゝゝ。成ゝの非人ゝあゝ助六をゝちぶせゝ。ゝの若もなく助六と
ゝち殺ゝ。ゝ散ゝゝゝし川へ。ゝゝふ甚ゝゝゝゝ光景家長ゝ足
せゆさねゝゝ残ゝゝれし。俥身の泥ゝゝれゝゝく勇ゝ成働
ゝゝゝれゝゝゝゝゝと。実ゝく賜ゝれゝゝ意休ゝくゝゝゝく
も討ひゝゝ。その賞品ゝれゝんゝとゝ力とゝゝく切くゝゝ門不大ふ警
ゝ。家長何等外ゝゝくゝれ成害しゝふゆと。後のゝゝ身をゝけく。
忙ゝく問ひゝんゝ。意休阿ゝとゝゝ若ひ侍女綾瀬を岩戸川へ泥
ゝとのひしゆゝゝれ。実ゝゝし退刻ゝ彼ゝ雄夫をゝとあやゝ
とゝひしゝ。彼ゝ三浦屋の白玉とゝふ妓女ふゝ。実の綾瀬ゝゝゝゝひ

あり。さてそれが汝をそそのかす。妓女は責しに必定せり。助六さんお殺し。
公ふるる雲もなくそれが佐をそそく用ゐ門平。歓会せよと又切りくる。
門平は何といひ、く言ふもなく。意休が小石よりはまつ紙
うぶひいづこともなく逃失なり。是ぞ助六が家よかつる。朽善
関屋専平は後世の命恙なく。三浦屋よりく白玉といふ妓女とるし
夜なり。彼ら計まく意休が尺八袋より仕のこる。宝剣をそあらはせ
ーやぐ。ちもなく語りそれば。三人ぶ共びいなづもなく。朽善関屋
いちそれより三浦屋よりそう。後世よりひくはめる物ぐるもなしそん
とその夜のくいひ出其夜は戸よりくも眠りつざりそ

助六は次日より風のそちとおひ。一日二日は枕をもあらげさうーが。医
師の計るしあるでいく日もあらむ公ち情くあくるふろ

二　おやゆどり

愛ふ又下総国千葉郡。大和田といふ所よ。素門の庵あり。前よ小
笹の垣とめぐらし。庁折戸苫葺ひ。後は谷に清く
ーて。公の塵をあらそ。常住讀経の声そえまるく。香煙窓をいぞい。
尼るよさん公細く鈴声寂よありて。国よそらあの林。庵主る
空信といふ尼なりし。軒端低く大なる加條樹あり紙あり村童
椋の木の尼と異名せり。彼尼一日近村を勧化し。暮ちく庵へ立

帰るおりしも。茅が軒端に音もせず。春雨しめやかに降ではれど。
なれ心を傷し。御佛にうちむかひ一心不乱に念仏し。鉦をならして居
たりけるとぞ。又武蔵國芝塲村なる。白酒賣十兵衛は。當國佐倉辺
の親類の許に。のがれざる事ありて訪ひ。ゆふべれより故郷へ立
かへらんと。此庵の前を過るおりしも。春雨一しきり降出ければ。晴るるに
ほどもあるよしと。彼椋の木のめぐりに立よりて。小止をまつに。往来の
人も衝ふわづかなり。旅虚無僧猿曳傀儡師祝部などいふ樹下
に雨をさけ。種々の物がたりしけるが。宇治大納言の古事もかくや
と思はれ。などといひあはせ居たり。彼傀儡師のいへるは。これより近きところ

あるは。武蔵國花川戸といふ所に住居つるが。彼又は助六といふ遊侠あ
り。紫の髪帽をもてあそび天日朗なる日も。木履をはきて六方をふり
あるき往来の人に喧嘩をしかけ。根に人の佩刀を拔とりて銑ん。
又ある時は大路せばしと仁王だちに立ふさがり。股をくぐらせ。さ
らば此道を通さじと罵り。畢竟狂人の所為なれども。其好ね
族は。韓信が辱をうくるもおなじと物ごる。彼祝部のいへるは。これも在
侯の神明に寓居のおり。花川戸の助六が風説は旦夕ききつたふが。彼
助六は何といふ名剣詮義のため。喧嘩にことよせ諸人の刀をぬかせ
みると語るに。十兵衛はそれならんと笑ひ合ひて居たる側

猿曳のおじげる男里人むらひ。そも此猿の木のもとる庵室
へ何者の住居ぞと問ひれば。里人答へく。此庵へ空信といふ二十計り
の美麗なる女僧。いやぐ盛の花なるよ。つるるあしや黒髪とそそひ
けんとうなる人惜ぞといふとねしと語るは。彼猿曳投首しくいのら。嗚呼
此のまゝなるべめて。浮世と為ん。誰がいつの世よりひ出りん世と捨
る身い美麗もいらせん。あれ人間も烟管のぐるまんまは。彼尼
の首をとりく。こぶ家婦の首とをげえくくとうち恨べ。あを
ふーれ男くと。旅虚無僧のいつるへ世よ入聟とふとるれこあらぐ。和
主あれる里人をとるく。此庵のいつ聟よるうるふいふとへは。猿

曳もとこゝをとち。妙計と賞しのや待ちべ。こぶ公油え待よ銭へ
いらねど。尼の女房も異物く夫とるふ還俗なしいべ女房よるるべと
やさあらべ媒介なしの人其處謝よへ馬小家よ張御札銭とらべよ
きのうせんとふよる里人もと笑ひをちのび此庵の尼へ佛道堅固
みて。夫もうんるんどいるひもうるべ。うねく當所よ一宇の御堂を
建立せんと費顔へ遠近を勧化なし。えや百両おやう金もあつう
しと同行る。木魚鉦鼓を拍子とうく猿の舞も似気なるべと皆
るみいうひどよりいれ雨へふよく降ちいう。所俗時べ此雲ぬれも
なべえれべ。莚一枚を頭よかうく欠生るもあう。又それくの所まて

傘うちんと走るもあり。皆東西に別れさる。彼猿曳いかやうんの
とひめる向持一く。ゆを又さ頭をとれ。半町ばかり立出しが。椋の枝
ゆく猿の叫ぶを聞つけ。大に驚き走りかゝる。汚計器を忘れる
と。猿と称ゝとれかゝし。飛がごとく外欠出残りしものハ一個の旅士
ホ白酒賣十五歳のこゝ彼士十五歳に成ハ方
う知らねど一樹のうげの両やどりも。るをれくに別れる。今旦下
と某二人こゝ。これらハ房州の者ゆへ近てわるゆい知方もなく。
今青一夜代菴に宿をとひやんとゝひけふが四老人よいこゝを
ゆと問ひれば十五歳も大に約び夫とそれも陪むをゆくゆと

行打戸をとくと音をひ。ちぐのよう言ってれば尼ハ出よくうけ
ぶひ。近てこゝろホ出知方も付ぬどとゝろ。白地なる屋ハれど。今
青い出ふ。あるさせの人。信れ。る両衣いとるるの衣架にかけを
ね。足そぐのうぐ得ぐとうくゆのうぐんと。実てこくゆくうぐ。二
人ハ暗夜に燈火を得るるとひしく。少時労をゆをあり。説話
両頭さくも雨寺門不ハ。鳥越村にく扣ハと訪ぐんぐ。其場代
辛ぐく逃失ぐも。當国伊倉辺ホ出の知方あれば彼呼をゆを
ぐ代ぐうを過ぐしが。白ひうう通ぐちぐ。猿曳門不代ぐて。
とやくと呼止む門不其人を見れば往年綾俊を責彼せし鳴義

とゝふ四戸あり。彼者ハ近曾側臥を病くゝり。多年あれども言葉分
らず。常又便をうがし物の用ゝさゝざれが門平只あるべ死わどゝ栄者
を述別れさらんとそる紙ハ拵少時とゝ。とあつは辻堂ゝ門平
を誘く言葉なるハ。これ迫刈ゝ多年どゝなせしあり。不意金の有処を
問をゝうぐあつく今青足下とゝれとゝめびとゝ盗とゝらんとゝ
あるゝこれ金の有所を少生ゝゝる功あれバ彼金を三ツゝこゝ。足下
又其一ツをまつらせ。これ其三ツをとゝらん若百両あるとゝ。足下又
三十三両二十目をあゝふべ。若二百両あるとゝハ六十六両四十目ゝ
あゝふべ。若三百両あるとゝハ一百両あゝふべ。若四百両あるとゝハ

四百両あるとゝいひつ。異帝紙袋ゝ懐中十両盤とゝ出せバ。
門平阿くと打笑ひ。先配分のゝ盗ゝくもおそるゝ。その資む
べゝ金ハいづくゝあるやと問へど。拵茲頭ゝ紙ゝ中ゝ。
悪しゝゝるゝ。皆金ゝゝ彩るゝと。脅ゝる猿の呼ぶもゝゝ。又十
両盤をとゝあゝる。門平ハ
つゝくゝ盗のゝゝ。ゝらんとゝる紙ハ拵茲周章押止ゝ足下ハ気短ゝ
田カゝ。ゝらべ語ゝゝゝ。ゝゝゝゝ多ゝゝ。ゝゝゝゝ大ゝる孫の木ゝ。その樹
下の庵室ゝ空信とゝ尼一宇の御堂を建立せんと。あゝゝ金
をあつめしゝ。女の一人住ゝんバ。ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

あり。病あり。盗をするとも大なる好物なれども。やがて疾くも死一人歩
きなんず。一度白丈を見るとも。いかに豆なべくくもがく。二度解血をと
るとも。偏身あびとく動ぐし。是皆癇積のゆゑなり。臆
病なるふいあらば。これ金の有をゆゑ。功あれば足下先
庵室へあのびとく。彼尼をくしあげ。庵中別なくくんれば足下
木魚をうつされよ。これ夫を暗号と。金の有所ゆゑをべし。若
又庵中別なる人あらば。これ物出るる功あるべしく。足下うち先
へ逃出べし。日頃ゆゑつる道なれど。命を的なる走らんとふるべ。平
らかにひ。ものゆゑき説話くべし。辻堂なく夜の更ぬもやがれば。

白ひの酒房よりうえといへば。袴門平が袖をひくべ。これ物出しる
功あれば。酒代の足下出るべし。やがて雨も止ざるゆゑの笠もこれうる
うの。これ物出しる功あり。必ず三ゲ一を忘れのよう。彼尼を搦め
ふ。ようくふ足の痛ざるやう公づけうべ。これ彼庵へ入智と
うべ氷人をゆゑを。ざれが彼へゆゑ女房と。喃々と
はぶべくへ。住人のぞくあるべ。さくも十去侍旅の武士へ尼が庵
へ。衝立ちう居く種ての物ぞうるを問。尼へ火炉に茶
うべ。ぶづう茶を煎く両人へ出。世塵を避ける庵なれ。
うとづうりのひとせ。ものくうの風情へ。二日へく赤くのうち。庭の一木の

若様さうみさくはらし。夫さん涙の間のあしよろ。砂ゑ塗れてうう
さくれば。塵塚へまれいとね。是も彼且ゑ紅顔あつく。世路ゑとると
いへども。夕れ白骨とうくく。郊原ゑ枯ねういふるゑ比せん。あのおく
大なる椋の木ある氏ゆく。妾と槁の木の尼と異名せるゑ複ろ
僧正ゑもしもひ出ると。何ゑさくいひ出る言葉のうちゑ。保く
身を恨ゑこころのうちをとわれば。何さる由縁ある女僧なるもと。
両人ゑゑひ居ゑう。かくく問詰時をうう。尼い納戸とおゝ紙所
ゑ。あやゝの衾をりふけ両人を臥しめ。小ゆうるれとう出。御燈くげ
く讃経ゑとゑ。ゑ文ゑる小次あし。野寺の鐘をさゝひきて。

軒守犬の吠る声遠ゑゑ物淋しく。松風板戸のをれをゆう。燈火ゆく
くちゑれいつのわぶふう雨晴雲散ーとおぼしく。朧ゑさくる月うげゑ。
窓の障子ゑ墨竹を画ゑ。竈炷のあゑうふ歌女い声ゑゑゑ
牧笛ゑ似ゑう。時ゑ林中の宿鳥。俄ゑ羽ゑれうて飛ゑうれば。
ゆゑ依ゑれゑ公仏ぞと。和ゑ障子をひれあけゑるゑ。玄奘ゑう
の大男。保の板戸をうゆ放ち。ゑと入つく尼ゆ弱腰ゑと蹴倒し。
声ゑゑゑせじとゑ拭ゑゑ。保の柱ゑうめゆう。是別人ゑあらぬ雨
寺門平く。門平彼尼を熟尼れい。義厳ある顔色。徳角ゑ方弗ゑう。
門平偶ゑうづれ尼のゑをいゑゑふ右の季指と無名指ゑう

門松
盗賊
尾ゲ庵へ
十六羽旅士

しるべさてい早舟をうりるっとをくるっを撃きっ尼も又かそるく盗人
の向をえるふ。雨寺門平るうれば一度をうぢ。二度三度彼っ毒み
よ苦しむいうる宿世の報ひとと位声さんも倶傳くあさんとる
神もるく手をぢの使ちうるうち。歯をうひおうう身をうるし。公の中
よ墨うう居ちう。門平ふ仏前の鉦鼓をとう。外向（暗号よ）
きとびい。鳴藤いうぢび居く。人なれ知ぜい木魚とといひうふ鉦
うちをうを若外よ人やあるとかそるくあのひとく。五よ耳（口を
よ世。をきっと穀ひうう。ふ亜のうちう引捌命よ包うる考紙
をとう出しまづ四五両いうあうとひうれうれば。ういふ菩提樹

の実。鳴藤腹さしくやあうん。間の紙門よおうくれば両人ぶ熟睡
おうる。顔のあうへうちうくとうかう。庚申の雪九の夜庭あうる
あやと。十六情偶月を覚せぶ。二人の盗賊ちく入く。彼尼ぶ
ふ綾うあげ。にあうんさぶしかもる光景ぶ老人うれば十六情々。
物わとうへぬ天性うれば。杖よおとしカぬれあう。門平よ切くうる
門平かどうれ飛おうう。経机をあうくうけ止れば机ぶ二つふ切られ
く。抽斗よいれをえる。小判四方ようち散う。門平そうこぶ中カ
振うち。二合三合うちあひしぶ。老人うれば十六情ハ略剣法を熟練
おうる男おれば代奴殺ぶ妾益くと。右の行ふよあうちひうぢう尼ぶ

掴めをひたわざく。尼い寄びくろ。あまくろ武幸と改めたら
とうあげく。落るる小判を拾ひ居る。侍接目づけあつくれば的づ
まぢで欲失ぢちを頭ようぶう。逃えんとうをと眼もえ。ぞうろ
えくるるさぞよい彼仁和寺の僧ぶ。足男うぶしもかやあうえん。門平い
十六侍よ坊ちとれ。うぶじしやらひえん。ようめれやうる侍接を刀
の下ふつたけくれば十六侍いろくおお刀欲失弾ようしとあるう。
ぢちゆよう切ようれく。血をさくうう公やとく。侍接二ッと成よう。
門平い其間よ。雨戸蹴ぶう逃出れい。雪よやうし旅の士ひとふ
納戸をちのび出。外の方ようぶい居く。門平を役うあげ。老人を

を志づめ。盗賊いろが捌ゆと。竹縁よひれとれば。尼を暖
くしを回持しく。おのれ門平往年い意休とあふれを若しえ
外ろれ後家も岩戸川ちづあしとやえん傳国悪ろ悪報あ
まえ。今とそちひちうあと。とうと眺くれば旅の士いと不審尼君
まい此賊門平ぶ名知りめひ。又意休ろ若しやうとしやえ
い伊吹氷上両家のうちふやうある西方まく仕ふやと可ろ尼を
顔さと赤ろ白。恥しうぶら妾い氷上曽根太郎ぶ側女早舟とや
めめくと答へれんば彼士夫ようとうれ。さとい兼く風説ろ少仕る。
若狭ちうぶめく侯女早舟主ようぶうろ。これも里見家ようろ

ある者なれど。其のひやうなる旅なれバ。姓名ハあかしがたし。里見日来りしく
見来せし武門平ハ尋問ふずれ仔細あり。ころからふあづけおかれける。門
平総ひそかに暁近く別れたり。十兵衛ハ黙してしばし居たりしが庵
に立かへりぬ。さてハ庵主さへ氷上の家にゆかりあるかたにはあら
じ。やはり由緒ありて。氷上兄弟が里見家よりあづかりし虵籤丸の
宝剣をうばひし者。竹杖に仕込て常に身をはなさず。道則に鉄
器を二ッに切たりしも彼宝剣なれバ。不意に雨中の雑談にく。
助六が扱捕もむなしかれバ。彼所に持たる金にへして立たとせる
と。尼十兵衛が和尚ひそかに万谷助六主従が宝剣詮義のくる。

しく垣間見たり。妓女の顔姿をめでまどひ。何某がりかくれかよんが
彼所の妓女見に来て恨み。彼方此方へ彼方此方するかたくなれど声
をかのぞかり。夫が言葉さへ低気なく。きびしく立帰れもあり
バ金をさく花主もあるとぞ。ちつくも厭ぐく空ものじさせり
くもあり。船めぐく。桜戸痃癖めくさげんと。呼ぶ声もかしまし
く。東西に走り。南北に行違ひ其中にもかく目立たる総角が。
ゆかりの色の紫髪帽むさんで。傘をかぶりと人目を忍ぶのたて。月
にかと夜も烏羽玉の黒羽二重に鮫ざやをいつねどなれたき。
助六が。丹前姿にさをかし。彼方此方を見かはして。あのひと

げよ。尺えなんば。徐角白夫と見れば。よろ喜び忍び出て走らせ。
別よ客人もおへさねば。たや比方へ来りぬ。侍女よとつぶやく
ものかろうもおいてなりと。言やりなるみ。助六も三浦や近く来
ぬ。徐角が側よ尾ろちかけぬ。少時ありて往来の人も小絶
なんハ徐角よ白ひく言々ハ。遥日ハ名ひかけど。此方と白玉
がきかろひふく。宮剣の盗賊を。伸父意休とおほろげ
知りなんど。是ぞといへ証拠なんとび。明白よ金美仕
を計来もがるし。千さよ徐角ぐろ。ろいども病よ臥し
日三秋のおもひなんし。今日やぐハ延引せり。侍女雅俗今

の存を白玉させみ存命ありとのを。彼が毋朽葉姉関屋ふ夢
へ。これが死ろ者の穢生ーぞく。ト也実ろ白玉の声ひ。
来ーー白玉よも對面はじ。此方よも心ひ。ろけくーーろし礼
も述べくかんどひつれろ。我病よ以めとび。東の方も枕辺
と去りかんど。さ世れ病よもめろざれよ。此方ハ二人ろ。ナが花
巷よ赴くべーーくーーめつれと。彼が夏々打捨ーーと。たや食候
なりのろ。宮剣の魚美古を貯要りと。ろも見ーーぬ朽葉
関屋が赤心よかろ。いやぐ白玉よ對面もとげさせと。
よ明日の夜を関屋ハも連来ん夫よりハさーめろーーれ

分の難義。宝剣の盗賊もめいと他人ならんまい。手紙おこさく
金弐分とい安々とは。仲又とのふ名ふかなくこれいのふ
ともさべし。若海の分よ若紙のくれ〻ゝ公うき変なぐ。何
卒内分ゝもひまく。彼宝剣紙外なぐ。これ不一下目えせつる
計東ゝのれまぢや。主の島元紙さえ蒙ゝうゝ紙助六が。丹前姿
のまゝそうろう打抜しく。又も花巷よ前ゝたりなうろう此一
度紙内分よゝのまんゝあれぞくいく信ゝらくのゝがれ
ど。徳角微笑しくつゝ。夜も少へ行るぐく。夜毎よ
ゝ浪ゝうゝ。新なく無ふ客人まい。唯與紙をへ。ものひいめり

げふの語ふのく。心の操ゝゆぐり付ぐど。漫よとひらぐ上しよう。
良人とも定つゝ君の難義なりのふ。其宝剣の金弐をぐ。コゝろ
望ゝくも做ゆんゝを。女子の道なと。ゆく少へ付ぐ。ゆ手ゆ
顧ざる無礼なる女ゆうと心のゝうちふゝゝもものゝうんが。君
が一夜の情まゝ。妾が百年の金紙もなふせん。の。妾休君の
怒ゝ紙ひゝ出し。妾が嫉妬紙なぐ。計一
べしと。助六ぐ耳ふ口紙ちうづけ。私語ゝとぐ。助六大よ弁ぐ尚も
密ゝうゝ紙ふちうしも。我造売声紙等しくなり。ゆくゝうゝ言
休君の来ゝとなうゝと言声よ。助六と袖の裾ゝ忍ばせ。

空知らぬ風情なりしく居たりけり。さしくも髪の意休を近曽
門平が浄瑠璃ふく。雨立坂うち殺しうたひし坂実となりひ。
今ゝうしろやうく誰惜れ夏もなりと。又ちとづゝふ通へども。
徳角ゝ雑面のゝうゝ。一夜ゝうちしけくかさゝるど。其心
づゝふ。意休が懸念を除ふやしく。今宵も暮る坂よりて
花巷ふ来り。何某が茶亭ふ徳角坂招ぎぬ上ど。病ゝうしは
坂いひゝく行もやゝど。白玉坂しく遅ひゝど。意休ゝ本言ゝ
げよ白玉ゝうち連三浦屋ふ入来り。徳角が側ゝ坂床机よ
腰ゝうゝ。過切ふ四分坂彼所の茶屋ふ待ひしふ病ゝうよし

哀へ〜ハいゝ坂れ労ゝうやと。袖のどゝふ向ひれど。徳角ハ意休
ゝ方ふ脊ゝむけ。ゝうふ答ぶれハ雑妓売ゝふとゝて
きゝよかゝひ。徳角ぬ〜意休君の来のひしよ。かどさゝぬ方のゝ
ゝうゝ屋のひ物ゝうもなりのじやと。異ハ内音くゝく言れど
徳角ゝうゝしき顔色〜く。めゝさんぶ。妾ハゝ休君の話ひひ
〜坂知らぬゝうゝめゝねども。雨の小止〜雲間の星坂一ゝ二ゝもぞ
ふれがゝうゝふ。答ゝもまづ做ものゝ。ゝうて今宵も来む
ひ〜と。うげの言葉ふ入ひゝね。又さゝぬ方坂ゝうまゝり。煙草
ゝうゝ屋ゝうゝれ意休もつゝかゝゝひ徳角が側ゝうく

彼角星は
くくへて
三尺休は四尺
助六は
くくれて
夏のさかり
うかぶ

うるも居うう。人々已が好ところに成りて楽と。楽に業も
好ごれば無しうるど。楽しうさに業も好べ楽しうさいへど教に
かに大穴　夫に成りしとそふた才のものに成。小子
ものよ慮元ものどと問ひくもとべ。彼角大空に指さしめもとそ
の人星の林のいやちげに成も。於女の客人に逢るどど。文字にそ
うと彗星も客星も。めの星のうらみめりと。博識の言ひ
其うちうに定て心よりね客星もめうぬべ。いく夜うう
くりうねしう。厚紙めうくかへせども。又ろうづまふ通ひうる
撃どさうぬ煩悩の牽牛。その七夕う今日やめふ。明日や逢ふと

無益柳巷よりひうくも。空よ銀河とふ何めう妾よ銀帯と
うふ帯めう。下級の天の川紙形ちつうとうめひうれうもうろう
側よ舌れさんも荊棘紙いぶくうちうぬ。現の海も鳴門のほ
め海とふ形丈字よ二ツうく。幕よ男もきうふ男も男とふと
別うけもど。深き涙うもめれうひうろ哭支もうぬうう
花ぷううう山路よりうんうう。外ふ線の数ぬき柳ふふ
里のめれへ。めと合て花びー星の名。よびひうろうて降る紙
と。めづく星のクアど。又異所へかうひの人百夜うもうろう手夜
すぐもうの名のどむくつけき男うん肌ふうんをかめひもうど。

と言ひそるてべ。言休を怒心頭にうちとり。板金剛とのて縁
角が袿の裾に入。中日ひるがわきかくしべ助六を床机乃
下ふかくひしと居くく陸奥鉄入の太刀つくれよ。もとしく蛇形
丸よりべもとし。扨ととかのひるど言休と顔見あわせれど。
言休悄然とうちおどろく。手ぐすく中日室よりおさあ。象い兎
の涙ためそぐど。何ぞどの辱のふらも。くるく傾城松女乃
ふかひと。害せん。とくつるひこがめやまうん。人おもひ人の面
るも人ぞとき人人となる人人とりせ。斯僧ひとおとふ怒ろ
しふもも人ひめるざらしよ。其中ひも人ひめるざる退却

月見ふたと人〳〵流星ひの星ひ別ひめり。他の金武いどし己が
花とかるむ扨扨女武神扶のかげひようひ。色武おりてめしど。
うちふちひ武討べひ討水月猿猴のくく人。猫武嵐のわう
ふどしと。側ひめうつれ。三ッめの香炉臺武とり出ひくく
いるど武香炉臺の三ッ足ひ。曽根ひ瀬ひ助六と兄弟
三人そろふどし。三ッの足乃力武めつくく百行の鬼ものと
ひど。今ひかくとひさまひ乃武わひて二ッの足武切おとし弟根
ひ瀬ひふひ武世武去つひべめとふ一ッの足めうひも。何乃
用ひろひべひ。豫仗が推量のるく。二人の兄ひ自滅とうひせ

られも。初の三六休が討束く。無念と云ひて立出く我れ
討と。めくさぐふ嘲哮りせば。側よりのふ雛妓売其由縁
を尋ねられども。何等変変やおられんと。手ふ汗拭掘
つあ。彼角が顔ばかりちゃりり居るが。かくてを舌戰のい
果ぐさもちりもじと。さるぐよ三六休ば和あ。彼角ねにを
竹葉をじの人。さるぐ公ふもりばもぐ宮ふが生子やる
よ。醒くのう由縁ば河の人と。雛妓売三六休とちりば補上
よのりりる。助六を人るばるもじ。床机の下ようち出て。
再度ば匂の討束る。宝剣の実否ば見とけられども。変

めくさぐと取戻を討ひのく。かくさぐられば置りしもよそ。
りりものび居ばが。兄弟が冒度ばつぐりんとりせば。仲又の
彼悪ば街よめくと。嗚呼我わど薄命りれ者ハりと数回
歎息りとふ。彼角ばとぐと打笑ひ君のごく実あれば仏を。
さ。おがとも理りはども。又りを討ものれべ。まず酒一ツ飲く
つめりりばりりひの人と。女童よ私語。助六とび両りれ一室に
思ばせりりさく彼角白玉ば近く拾ば。密ようち語ふ内角
不幸はしく妓女とりる。苦闘のりりよ姉妹のむりびせもの
きえりりる。立安内角ば大変のり。何ふん差引

のうえやと言へば白玉うち笑ひ。なるほど作ふこそ付
と。今を姉上とちのふのくみもあるべく。妾が主君と助六君の
縁の切れる方なるべし。公のうちうちを主とも親とも仕れよ。
くれ人今をよりぶ大夫うとも。なんぢのうちにびきとひとへ。彼
角大よ弄び。ゆくたき夫別の仔細はあれども。市丸今宵は花
巻紙古今下かしくのうとくふよ。白玉やあるうふおりひかけぬ
ふしめとぞ。巻もかうとと彼角が顔うちまもれよ。彼角かさ
ねくさ。ちどくもむべう。其由縁とふる。助六君のでる直諒
なれば公うちのふ悪逆うとべくく。伸夫とふ名ふ手ざ

うどと。夫婦のべくなくもんと。若彼宝剣人手ふ見たるに後悔
ちくく跡白し妾今宵言依地賺。ちくさぶさまよふのくなし。酒
とどさ也。彼宝剣盗くく出さん。市丸妾よかう。宝剣持く
花巻紙ぬ子出。花川戸よりうねぬき。関屋ぶのと中人よ見たを
べく。一度ち道うくぬ計ひ地助六君の怒りもふうも。宝剣さん取
うどせば。再度世ふ出のふし。さとびた公とけく後妾も夫婦
加と助六君と二世ちぐもと。かふうこぶ月の欲よ似つとと
君よちむくも君の為し。市丸うふおぶとやくいひくとを
白玉も弄びちうし。妾宝剣地りうく。花巻出んるかく

白玉蛇形丸を盗て

夜はしめるねども若姉上の難義とやうこのふ言葉紙
うち消しめるて彼風を死ぬるうみ妻計よ旨めれば今夜八ツ
時行紙暗号る妾ら坐敷よ去のぶべしと。御角を横よのぐう
言休ざーさふみうう。過ぎりあを竹葉をぐせし主人内公みさう
夜もやせしう。醒くのちを向よ行ると夜のこ多ーなどのう
なき親ーきを紙のべ伸へ多見い。言を抹を甲夜ちうの酒燕生
紙へぐくしぐれうんなるべ。とを我仏の表逆よ。ゆをぎるれを
をゆるのう。待くべ甘奈ゆ一日もめうるれなをうつ
ひれうう〜飲むぶ。御角多言紙吐ざるさ紙よ混のぐく醉ひ

前後も去くど打ち。御角い公ふ弄ひ用めぐべ千紙なくさんと
人紙遠ざけ。言休ざ枕辺を捲ざるよ果ーく錦の袋。ひとつる
一品あう。去夜ーなくんと盗をとう。ようく騰紙ふ去めく年
ざゆく往行燈一おるひ。暗うのやなーさうう出れば折ーもハッ
の時行の車ゆぐれ因果と白玉ざ。待ぐや夜さん長廊下常
なれされ坐敷をも。去のぶとのふとろとうたくふつまぐ紙門
よあうう。おうふーども白玉とをでとうあひ。夜ーおどろき。姉ぐん。
白玉うと。問ふのめうくのとん紙むを夜息紙つあく次の間
よ去のび出神仏のめぐくめく首尾ーくめをとを取ろと。宝剣

と手ふるまうと。白丸を押のたぐき。障子うちあけうちうえかれる。
往来ちげきたんだうちも。そや夜半ふく人も小絶しとぶが
しく。提灯の火かげも又へさとび。往けどしくまセなうく。小屋根よ
かアくうち。御宮屋よりうろ。腰帯成うちかけく。穴うと外面
よ。飛下りる。絵角をしくく。大よ。丈びる。公づくる上ゝを
覆。白玉めがけ投ゆれ。女童が声ーく。祝角主くく
うぐよ。室知ぬ面のうしく。のるかしし。酒の醉成さきんど。
風よ。ふる一居つる。何夏めやと障子ととりうとびう
晴島一声雲間よ。ぱうと。白玉々難く花巻を

まるび出ると。暗夜とゆひ殊ようちの絵もまるごれべ行ゆせんと
ゆるふ。花巻ぐひの戻りかどる行あひ如渡得船のちひ
ーく。彼竹賀ふうのう。花川ゆへ急ぎゆくうもん
○此助六が前渡の條と。下巻のちがものさぐのつゆの條と
今日夜の話說く。仲條々柳町の廓街上より。三浦屋
が楼つう。廣半ふうてあ成果る。次の條々花川戸新
鳥専平が閑居。前夜より次の日ふうれの為成ゆう。
夫ゝ賀ゝ又ひた